

『ハイ。』と言つて、暫くすると、御社の扉がギーンと開かつて中から出て來ましたのは、綺麗な身の、透るほど薄い翼を持つて居る、紅蜻蛉でした。一同を見るより。

『これは、蝶々さまでムりますか、お珍らしいです。』

『ハイ、只今戻りました、何卒神様へお取次ぎを願ひます。』

『只今お歸りでムいますか、餘り皆さんがお歸りが無いので、神様も大層御心配をなすつて入らつしやいました。ご遠慮なく、此方へお這りなさい。』と言ふので一同が、お宮の内へ這りますると、神様も大層御満足で、莞爾々々お喜びなすつて居ります。

『只今歸りましてムいます。』と蝶々一同が御前

へ平伏致しなすると。

『皆も達者で歸つて呉れて何により嬉しい。さあ是れから皆が春の野と夏の野で何んな面白い事をして遊んだか、物語しなさい。』と言ふので、一番大きい蝶が、恐る／＼首を擡げまして、小蝶子之助が京ちゃんにお世話に成つた一仕始終を物語しなすると、神様も非常に御感動なすつて直ぐに京ちゃんのお所へお禮のお使を遣りましたとさ。

(守り神様の巻をばり)

傲慢な男

小島松之助

一人の傲慢なる男がありまして、西瓜圃の傍にある榎の木の根に腰をかけて息みましたが、じつと上を見て榎の實の結つてゐるのを眺めて、獨り

頭を振りながら、

「さて、此の大きな樫の木に、あんな小さな實
が結つて却つて、あの、細い蔓には、あんな大き

を打たれた、若し、此樫の實の大きが西瓜の様で
あつたら今に此鼻は潰されてしまつたらう、し
て見ると、やつぱり私しの思つたよりは都合よく

な西瓜が結るとは、何ん
と不都合な話では無いか

出来て居るのだから。

若し私が世界を造つたな
らば、樫の木に西瓜を結

笑ひ草

三河 近藤とさ子

らせて、あの蔓には樫の
實を結らせる様にしたも

わたるものは食ない
妾しの隣の鎮夫さんとい

のを、不都合なとだ」と
獨り言を云ふて居りまし

ふ今年六才になる男のお
子さんが、何時も妾しの

た。すると、樫實が一粒
落ちてきて、この人の傲慢な鼻先を打ちましたの

所へ遊びに來まして、お

で其男は吃驚して

話をして頂戴、御菓子を下さいといひます。或時
妾しが、鎮ちゃんいものを上げるから、食べま

「嗚呼、私しの傲慢が過ぎたもんだから、忽ち鼻

すかと申しますと、何でも食べると申しますから